
静かに煌めく星のように

柳ヶ峰 凧兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

静かに煌めく星のように

【Nコード】

N5078E

【作者名】

柳ヶ峰 風兎

【あらすじ】

満天の星空が遙か上空に広がるダークブルーの空のもと、僕は1人の少女に出会った。彼女は傍若無人で自分勝手で、どうしようもないほどに我侖だけど、そんな彼女に僕は惚れてしまった。これから始まるのはそんなどこにでもあるような物語。けれども、僕にとってのはたった1つの大切な物語。さあ、始まります。

プロローグ

木見谷^{きみや} 美香^{みか}は、ひでえ奴だ。

なぜって？それは今日あった事なんだけど、僕が彼女に善かれと思っ
て買って行ったアップルジュースをさ、美香ったら、「そんな
モノ飲みたくない、オレンジジュースがいい、早く買ってきて」っ
つって僕が手渡したアップルジュースをゴミ箱に投げ入れたんだぜ？
ありえねえだろ？それでもってひでえだろ？木見谷 美香はひで
え奴だろ？なあ、そう思うだろ？

それにもしアップルジュースが飲みたくなかったんだとしても、
せっかく買ってきたのを飲みたくないっつって捨てるなんて酷すぎ
だろ？

せめて僕に返すとかさ、そういう事するだろ？普通だったらさ。

でも彼女はそんなことしないんだ。しかも目の前で僕の買ってき
たアップルジュースがゴミ箱に投げ入れられるのを見て固まってい
た僕に、「ほら、さっさとオレンジジュース買ってきなさい」て言
ってお見舞いの品、一個30円のリンゴを僕に全力投球して急かす
んだぜ？最悪だろ？木見谷 美香は。

でも僕はそんな彼女に怒鳴ったりしないんだ。何故かできないん
だ。

そんな僕は美香に「ゴメン、すぐ買ってくるから」とか言っ
て、すぐさま一階のロビーにある自販機のもとへと向かって駆け出
してしまふ。

普通だったらこんな性格最悪の美香に従う必要なんてこれっぽ
ちもないんだけどさ、何故か僕は彼女に反抗できないんだよね。

いっそのこと彼女の事を無視しちゃってもいいんだらうけどさ。

何故か僕は自販機に100円入れてオレンジジュースを買っちゃうんだ。それでもってすぐさま美香のいる病室に向かって走り出しちやうんだ。

何故なんだろうね？美香が可愛いからかな？でもそれだけだったらとつくに僕は美香を無視してるはず。……ていうか、僕も一応病人なんだからこんなに走ったりなんかしちゃいけないんだよね。でも走っていかないとまた今度は「遅い！！」っていつてリンゴを投げつけてくるんだろうからさ。けっこう痛いんだぜ？リンゴって。

「ほら美香、買ってきたよオレンジジュース」

「……………」

あれ？ちゃんとオレンジジュース買ってきたのに。何でそんな不機嫌そうな顔して僕を睨みつけてくるんだ？美香は。

そんな僕の意味が練り込まれた視線の先、美香が小刻みに肩を振るわしている。どう見ても感極まって震えているわけではなさそうだったが、別に僕は間違った事はしていないはずである。つか寧ろこんなに早く買って戻ってきた事を褒め讃えて欲しいぐらいだ。だけど美香の口から出てきたのは僕を褒める言葉では全然なかった。むしろその逆……………」

「バカ！！私を買ってきたって頼んだのはオレンジジュースよ！！」
「え！？だから買ってきたじゃん、オレンジジュース」

僕がそう言うと、美香はその手に持ったオレンジジュースの缶を投げつけてきた。ついでにこの缶はステンレス製。当たるとめっちゃくちゃ痛い。それはもう半端なく痛い。そんな缶を美香は僕に向かって投げつけてきた。まあ、僕はこんな事にはもう慣れてしまっていたから、ちゃんとキャッチする事ができたのだが……………。それによってさらに美香が不機嫌そうな顔になる。どうやら当てる気満々

だったらしい。

そんな美香に、缶のラベルを確認した僕がもう一度反論する。そりやもう何度も確認してからだ。

「だからこれオレンジジュースじゃん!!」

「バカ!! これはつぶつぶ入りじゃないの!! 私がつつぶぶ入りが嫌いな事知ってるでしょ!!」

そう言われてもう一度ラベルを確認する。うん、確かにつぶつぶ入りだ。でも美香がつつぶぶ嫌いななんて聞いた事がなかった。だから僕はもう一度反論する。

「そんなこと言ってなかったじゃん!! ていうかつつぶぶ入りも美味いんだからいいじゃんか。同じオレンジジュースなんだし」

そう僕が言ったとたんに美香の顔が鬼になった。

「バカ!! そんなこと言われなくても判りなさい!! それに私がそれを飲んでもし死んじゃったりしたらどうすんのよ!! 責任とれるのっ!!」

「そ、そんなオーバーな。それにこれだって美味いんだぜ? 死んだりなんかしないから飲んでみなよ」

美香は本当に理不尽だ。そんな言われてもないことが判るかってんだ。それにつぶつぶ入りのオレンジジュースごときで死んでしまふなんてありえない。

だから僕はもう一度反論を試みた。けれども……

「もう、彰のバカ!! 出てけ!! 二度と来ないでっ!!」

「なっ!!? ちょっと待ってよ美香っ!! そんな——」

「いいから出てけっ！！二度と来んなっ！！死ねっ！！」

美香はそう言うと、さっきゴミ箱に投げ入れられたはずのアップルジュースを布団の中から取り出し、僕に投げつけてきた。

それを僕は左手で受け止めると、今度はリングを振り上げた美香から距離をとる。だがそこをつかれて、今度は美香がベットから出てきた。当然僕はその分だけ後退する。すると美香はもう一步踏み出し、リングを全力投球。僕は両手が塞がっていたので、それを右腕で受けた。めちゃくちゃ痛い。なんか肘の、当たったらジーンとする部分にジャストミートしたので、半端なく痛い。

そんな体をくの字にして痛がる僕に、美香が蹴りを入れて病室から僕を蹴り出した。そのまま病室のドアを閉めると、病室の中から「二度と来ないでっ！！来たら殺すからねっ！！」と言い放つてきた。

僕は蹴り出された姿勢のまま、病室前の廊下で暫くの間痛みに呻き、やっと痛みが引いた頃になって立ち上がると、トボトボと自分の病室に向かって歩き始めた。

なんだか「死ね」とか「殺す」とかボロクソに言われたので、やけに心が痛んだ。うん、大ダメージだね。たぶんレベル3のコラッタとかに引つ搔かれただけでバタンキューだね。

しかも「二度と来ないでっ！！」って言われたし。

でも、それで本当に僕が明日から来なくなると、美香の方から僕の病室に来て、真っ白なベットの上に横たわる僕にお見舞いの品で貰った果物とかを力一杯投げつけてくることだろう。そしてそのまま痛がる僕に背を向けて、無言で病室を出て行くのだろう。そんなもって僕はそんな美香を追って、すぐにベットから這い出し、全力疾走で美香を追うのだろう。

これまでにそういう事が3回あったからほぼ確実だ。

じゃあ早くお見舞いの品から、投げつけられると痛そうな物を抜いて来よう。

僕はそう決意すると、トボトボふらふらと自分の病室を目指して歩く足を速めた。たぶん毎日のようにこんな事をしているから退院できないんだよな。と、そんなことを考えながら病室を目指した。

一つだけ断っておく。

これから始まるのは僕、霧島きりしま 彰あきひと木見谷 美香の二人が会おう、どこにでもあるような、ほんの些細な物語だ。それでも僕にとっては、否、僕らにとっては特別な物語なんだ。

いや、ちよつと違うな。

僕らにとっては、本当に本当に大切に特別な物語だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5078e/>

静かに煌めく星のように

2010年12月30日02時25分発行